



障害がある人には、どんどん外へ出てほしい。
そうすれば、社会はゆっくりと、優しく変わっていく

ココライフ 編集長
株式会社イベントバンク 代表取締役
神田昌彦さん
聞き手 編集部



Cocorife (ココライフ) は、障害がある当事者たちが作るファッション雑誌。編集長の神田昌彦さんは、当事者の目線で情報を発信することで、障害のある人たちが「もっと表へ出られるようになればうれしい」と話します。

**障害者のための
娯楽雑誌を作る！**

「障害がある人のためのファッション雑誌は、ひよっとして、日本では初めての試みではないでしょうか。しかもすごくおしゃれで斬新です。」

神田 私はもともと編集プロダクションにいて、そこを辞めた後は現在の「イベントバンク」という、自治体のお祭りなどのイベント情報をネットで配信する会社を運営しています。今はその仕事が終わった後、土日を利用して雑誌を作っています。

最初にこのお話をいただいたときに

は、障害についての知識がまったくありませんでした。私が子どものころは、

特別支援学級も少なかったですし、障害がある子どもと会う機会はほとんどなかったのです。1週間考える時間をいただいて、障害関連の書籍を読みあさりました。すると、「障害を乗り越えて、今はこんなにがんばっています」みたいな、涙なくしては読めないような本ばかりだったのです。自分はこの分野の知識もないし、もしこんな「感動もの」の雑誌を求められているのであれば、私には無理だな、と思ったのです。

だから、そういうのはできないけれど、「もっと気楽に読める雑誌なら作

PROFILE ● かねだ まさひこ ●

1964 (昭和39) 年生まれ。1985 (昭和60) 年、株式会社NHK美術センター(現NHKアート)入社。1988 (昭和63) 年、学生マーケティングを主業とした株式会社インテリジェントターミナル総合研究所設立に参画。1993 (平成5) 年、役員として同社入社。雑誌・書籍を中心にした編集制作部門を発足させる。主に株式会社リクルートやびあ株式会社の情報誌の編集に従事。2008 (平成20) 年3月に株式会社イベントバンク設立。現在、契約企業30社以上、年間情報配信数3万件を誇り、業界トップ。同年よりココライフ編集長に従事。

れますけど」って言ったのです。それであ、好きにやっていいということだったので、最初は男女、障害の種類、年齢も全部網羅した、ファッション中心の娯楽雑誌『ココライフ』を作ることになったのです。今は女性だけがターゲットになっていますが。

— 本当に、ファッションあり、お料理あり、エクササイズあり、読み物あり、楽しいことが盛りだくさんですね。

神田 面白いですよ。必見は、毎回当事者が本音を語る「覆面座談会」です。いままでも「恋愛」「セックス」などをやってきました。今度は「結婚」がテーマです。恋愛は本人たちの問題だけど、結婚は家同士の問題だから、きつ

とろんな苦労があるでしょう。たまに障害があるというだけの、普通の女性の、等身大の思いを聞くことができます。

これまで過激なこともたくさん試みました。男女分け隔てなくやっていたときは、首から下が動かない男性にスカイダイビングを体験させたり、全盲の女性に崖を登らせてロッククライミングを体験させたりしたこともありま



◀リニューアル版「CoCoLife」女子部。モデルも編集も、何だってこなし



◀旧「CoCoLife」。表紙モデルはすべて障害のある女性たち

年金をもらって暮らしているのだから、本当は賭けごとなんて、やったら怒られるかもしれないね。腕に障害のある人にジャグラー教室を実施したこともあります。いろんなところからクレームがくることを覚悟していましたが、特にこなかった。「障害者だから」ということで、本人がこれまでやってみたいけどできなかった「危険なこと」や「ちょっと悪いこと」を、どんどんやりました。結構コアなファンが付いて、意外に受けがよかったです。

— 障害者はおとなしく、いい子でないきやいけないような風潮があるから、やりたくても我慢していることって、たくさんあるのかもしれないね。ところで、CoCoLifeの編集スタッフは何人くらいいるのでしょうか。

神田 全国に20人くらいでしょうか。現在スタッフの多くが当事者です。

2008（平成20）年から季刊で13号続けていたのですが、資金繰りが難しくなると、一度休刊したのです。しかし、読者から、特に女性からぜひ続けてほしいという強い要望があり、友人たちとお金を出し合って、あまりお金をかけない形にリニューアルし、完全ボランティアで『CoCoLife女子部』を昨年からは再スタートすることにしました。以前は販売していましたが、今はフリーペーパーという形でやっています。プロのライターや編集者を雇う余裕はないので、今まで読者だった人やモデルをやってもらっていた女性たちに「スタッフとしてやらないか」と声をかけたら、これだけの人数が集まりました。今はボランティアでやってもらっているのが取材費用も出せず、申し訳ないと思っています。いずれはランチャイイズ化して、みんなにギャンランチャーを支払えるようにしていきたいと考えています。

す。それから競馬場に連れて行って一緒に馬券を買いました。彼らは障害者

◀毎回話題の覆面座談会。みんな普通の女性。お年ごろになれば男性に興味津々



◀それぞれの障害をメリットに変えるようなおしゃれのしかたがある。これなら外へ出るのも楽しみに



障害者ならではの 目線を大事に

—リニユールした雑誌も、とても経験のない人が作ったとは思えません。お洋服もすてきですし、杖や車椅子などでもおしゃれができることを知りました。

神田 「障害ならではの」の目線が入ったファッションというものがあるので。たとえば車椅子だと大抵上からのぞかれます。だから女性としては、上から見たときのヘアスタイルが気になるわけです。洋服も、ずり上がっちゃうからミニスカートははけません。じゃあ、足をきれいに見せるためのファッションはどんなのがいいか、とかね。海外では、車椅子のホイールのデザインとイヤリングを同じにするなど、日常的におしゃれを楽しんでいます。日本では、障害者用の洋服を作

る、障害者のアイテムにデザイン性を付加するという発想はほとんどありません。もし協力してくれるメーカーがあれば、ファッションショーをやりたと思っていますのが。

正直に言うと、苦勞も多いです。通常、ファッション雑誌の撮影に使う洋服は、メーカーから借りるのですが、遠まわしにお断りされることも少なくありません。特殊な子たちだと思われるているのです。彼女たちにしてみればこうした対応は慣れていることだけど、やっぱり傷つきますよね。

それから、全国をめぐる「街散歩」コーナーがあり、ランチのおいしいお店なども紹介しているのですが、店選びが大変です。店内に車椅子が入れるほどのスペースがあるか、大きな段差がないか、ある程度の広さがあるトイレがあるかなど、一つひとつ細かく確認していかねばなりません。インターネットのグルメサイトを見たつ

て、トイレの幅や奥行きまでは載っていませんからね。健常者には情報があふれすぎるほどあふれていて、選別するのが難しいくらいですが、彼らにとつてはほとんど情報がないのです。

—そんな苦勞があるとは気づきませんでした。私たちは、もっと障害がある人への理解を深める必要がありますね。

神田 見た目で分かりやすい障害の場合は、比較的周りから手を差し伸べられやすいと思うのです。私たちの雑誌は、ビジュアルで見せているので、どうしても障害があることが分かりやすい人、たとえば車椅子や杖を使っている人などを取り上げます。しかし、これからは「見えない障害」を抱えた人について、どう扱っていくかが課題だと思っています。たとえば発達障害や聴覚障害などは、見た目では健常者

とまったく見分けがつきません。全盲の人なら杖をつけているので分かりやすいですが、弱視の人で杖を使わない場合は分かりません。今連載しているページで、「見えない障害」の子を持

つお母さんの手記を載せています。ここでは、障害が周りに理解されにくいことで、苦勞や葛藤があったことがつづられています。また、障害のある子と親の関係性を見ていると、すごく仲

▲（見えにくい）障害がある子どもを持つ親の手記のコーナー。さまざまな葛藤がありながらも、子どもを思う親の思いが つづられている

◀「街散歩」では、パワースポットをめぐるながら、「バリアポイント」を紹介している



神田 彼女たちのコミュニティは意外に小さいんですよ。あっちのコミュニティでやっている活動が、こっちのコミュニティではまったく知られていない。当事者同士がお互いの生の声を聞くことって、実はそんなにないのです。そういう意味ではこの雑誌は当事者が全部作っていますので、役立つことも多いと思います。たとえばグッズ紹介のコーナー。この子は指が3本しかありません。けどどしつかり

—当事者同士で、情報交換はあまりしないものなのでしょうか。
神田 彼女たちのコミュニティは意外に小さいんですよ。あっちのコミュニティでやっている活動が、こっちのコミュニティではまったく知られていない。当事者同士がお互いの生の声を聞くことって、実はそんなにないのです。そういう意味ではこの雑誌は当事者が全部作っていますので、役立つことも多いと思います。たとえばグッズ紹介のコーナー。この子は指が3本しかありません。けどどしつかり

一般事務の仕事をしています。このコーナーでは、実際に彼女が使っている、使いやすいグッズを紹介してらっています。私たちやメーカーが第三者目線で勧めるものよりも、彼女たちの目線で見ると、使っていて、本当によかったものを紹介したほうがいいじゃないですか。

街散歩コーナーでは、「バリアフリー

ポイント」ではなく、「バリアポイント」を紹介しています。たとえば京都を訪れるとすると、古いお寺や神社の周りは砂利道や石畳です。「たとえばここに段差がありますよ」「ここは一人で上がるのはきついです、後ろから押してもらわなければいけないですよ」など、どの程度の障害の人が紹介しているかを写真で見ることでも判断がつき

◀障害がなくても、便利グッズを賢く使いながら仕事をこなす



◀「ふたりのあいだ」では、どちらか一方が、障害工種のある夫婦を紹介。障害を乗り越えて結婚するカップルは結構多い



もちろん企業とマッチングしにくいジャンルもあるのですが、働いて、納税もして、好きな洋服を買って、お化粧品もして、どんどん社会に出て、不満も言っていて、不便なところを改善してもらって、最終的にバリアフリーなんて言葉がなくなればいいと思います。

アメリカなんかだと、ドラマにも車椅子の人たちが普通に出てきたり、お人形さん遊びの中にも車椅子の子が必ずいます。日本だといまだにタブーです。見慣れていないのです。私たちは、障害者にどうやって接すればいいか分からない。だから、当事者から声を上げていくことも必要です。自分た

ちから表に出ていくようになれば、時間がかかるだろうけど、社会がもっと優しくなるんじゃないかな。そのためにはスタッフである彼女たちが、先頭をきって出て行ってほしい。私にガミガミ言われながら、泣きながら、けど仕事の合間にちゃんと雑誌の仕事をします。根性のある子たちだと思えますよ。尊敬もしています。彼女たちなら、きつとそれができるでしょう。



『Co-Co Life☆女子部』（季刊・年4回発行予定）を常設設置していただけの場所を探しています。

特に障害のある方が多く集まる場所のスペースのご提供をお待ちしています。

配布申し込みは

Co-Co Life ホームページより

<http://www.co-co.ne.jp/>

また、誌面は電子ブックからも見ることができます。

自分たちで社会を変えて いってほしい

「ここにバリアがあるよ」と教えてあげるだけで、行動範囲が広がるのです。

―障害のある人は、やはり、あまり外へは出ないものなのでしょうか。

神田 感覚的なものですが、たとえば車椅子ユーザーの7割くらいは、実は引きこもりに近いのではありません。そういう子たちを何とか外に出してあげたいのです。

今、就職難が叫ばれていますけど、障害者枠でいうと、結構求人はあるんですよ。だけど応募者が少ない。なぜかというところ、やはり社会に出てこないからです。「無茶を言うな」と怒られるかもしれないけれど、もっと働いたらいいと思う。働きに出て、どんどん迷惑かければいいじゃないですか。